



こーひーぶれいく

## Made in Occupied Japan

大野 和子

Ohno Kazuko

筆者の出生地である愛知県は、陶磁器の産地として知られています。瀬戸物や常滑焼の食器を日常使っている方も多いのではないのでしょうか（常滑は今では招き猫の一大産地に様変わりしましたが）。

筆者は医師になって以来、放射線科医としての仕事と並行して、瀬戸市の窯業従事者の安全衛生管理にもかかわってきました。粉じん対策や無鉛絵の具の普及に、若さゆえの正義感で取り組んでいた日々です。進行したじん肺症の胸部X線画像や、鉛による末梢神経障害で変形した手の所見は、今も鮮明に記憶に残っています。

一方で、瀬戸には驚くほど高度な陶器技術が息づいていることも知りました。小さな町工場で、ドレスデンやマイセンに引けを取らないフィギュアが作られ、世界の一流博物館のミュージアムショップに並ぶ陶磁器のレプリカも生み出されていました。繊細な筆遣いをする作業者たちは、まさに無名の芸術家集団でした。

彼らに鉛や有機溶剤の健康診断を受けてもらうため、研修医時代は臨床検査技師と共に毎週巡回していました。瀬戸物好きであることは町工場の間でいつの間にか知れ渡り、工場の片隅で紅茶やコーヒーを自社製のカップで振る舞われながら製造工程を覚えてもらうこともしばしばありました。現場を知ることの大切さ、これは後の放射線管理の仕事にも通じる原体験です。

ある日、鉛健診で訪れた工場の隅に、廃棄予定の陶器が山積みになっていました。工場の社長さんが小さなコーヒーカップを手に取り、「占領下の頃の製品だよ」と裏の刻印を見せてくれました。Made in Occupied Japan その文字に目を奪われると同



写真 (上) 1940年代後半に製造された輸出向コーヒーカップ  
(下) Made in Occupied Japan と底に刻印されている

時に、敗戦直後であっても戦前と変わらぬ陶器技術で海外へ輸出していたことを知り、嬉しくなり、また誇らしくなりました。これらは主に米国へ輸出されたそうです。

興味があるなら持って行っていいと言われ、新聞紙に包んで持ち帰りました。母は筆者と同じ反応でしたが、祖母は特に何も言いませんでした。敗戦で多くを失った祖母には重い事実を突きつけてしまったのかもしれない。

瀬戸市文化振興財団によれば、「Occupied Japan」の表記は1947年3月から1949年12月まで義務付けられ、その後も1952年4月の講和条約発効まで一部に残っていたといえます。戦前から受け継がれてきたものづくりの精神は、戦後日本の急速な復興の礎となりました。

原子力発電所の安全管理があらためて問われている今、あの小さなカップに刻まれた **Occupied Japan** の文字に、日本人の不屈の精神と、勤勉で誠実な心意気を重ね合わせています。

(京都医療科学大学)